

# 千音寺遺跡第5次発掘調査報告書



2005

名古屋市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、名古屋市中川区富田町大字千音寺に所在する千音寺遺跡の第5次発掘調査報告書である。
- 2 調査期間は2003(平成15)年11月11日～2004(平成16)年3月31日である。
- 3 発掘調査は、第5次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事にともない実施したものである。名古屋市上下水道局の依頼を受けて、名古屋市教育委員会文化財保護室による調整のうえ、名古屋市見晴台考古資料館が調査を担当した。調査担当者は、水野裕之(現・名古屋市教委文化財保護室)・田原和美の2名である。
- 4 本書の水準高は東京湾平均海面(T.P.)を使用している。なお、名古屋港基準海面(N.P.)は、東京湾平均海面(T.P.) + 1.4119 mである。方位は世界測地系による座標北を使用している。
- 5 本書は調査担当者および館職員の協力を得て、田原和美が執筆・編集した。
- 6 発掘調査に際しては、下記の方々および機関にご尽力を賜った。ここに厚く御礼申し上げる(敬称略・順不同)。  
名古屋市上下水道局下水道本部、名古屋市住宅都市局住宅整備課、岡田工業株式会社名古屋支店  
水野直樹
- 7 出土遺物および図面記録等については、名古屋市見晴台考古資料館にて保管している。

### 目次

I 遺跡の概要	…… 3
II 5次調査の概要	…… 8
III 小結	……19

### 図版目次

図1 尾張平野の地形図	…… 3
図2 遺跡分布図	…… 4
図3 「富田荘」条里線位置	…… 5
図4 過去の調査地点および5次調査地点位置	…… 7
図5 5次調査平面図	…… 9
図6 土層図—管路A①	……11
図7 土層図—管路A②	……12
図8 土層図—管路B	……13
図9 土層図—管路C	……14
図10 土層図—管路E	……15
図11 土層図—管路D	……16
図12 土層図—管路F	……16
図13 土層図—管路G	……16
図14 土層図—管路H	……17



写真1 市営北宮田住宅  
(北から/下水道工事は市営住宅建築に関連して実施された)

# I 遺跡の概要

千音寺遺跡は、名古屋中川区富田町千音寺付近に所在する、古墳時代～中世の散布地として周知されている遺跡である。現在の遺跡推定範囲は東西約600m、南北約1000mと広範囲にわたっている。

## 1 地理的環境

千音寺遺跡が位置する名古屋市中川区富田町は、名古屋市域の最西端にあたる。

名古屋市の地形は東部の丘陵地、中央部の台地、西部の低地の大きく3つに分けられるが、中川区は西部の低地に含まれる。この低地は、木曾川・長良川・揖斐川・庄内川などの河川が運んできた堆積物で形成された沖積平野（沖積低地）の一部であり、遺跡付近は、おもに庄内川によって形成された低地である。

低地は、河川により運ばれてきた砂や粘土が堆積して形成された微高地である自然堤防と、自然堤防以外の低い部分である後背湿地（低湿地）とに分かれる。低地部の遺跡の多くは自然堤防上に分布するが、千音寺遺跡もまた、自然堤防上を中心に広がっている。

現在の庄内川は海部郡大治町の東側付近から南流、分流は同町付近から西流しているが、過去幾度かの氾濫のたびに流路が変わり、分流もまた時代ごとに変遷している。だが、千音寺遺跡に大きく関わる古代～中世の庄内川の流路は、現在のところ不確定である。

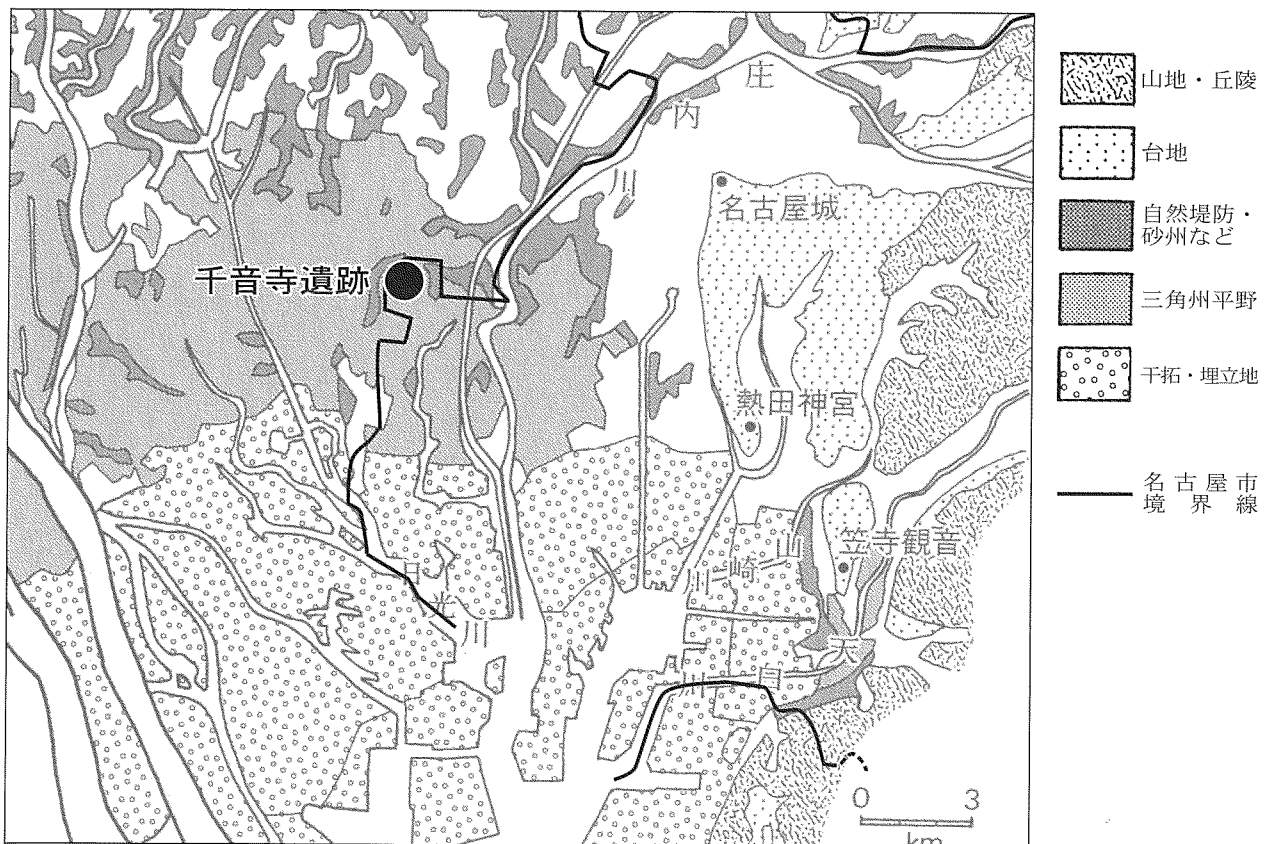


図1 尾張平野の地形図（『新修名古屋市史』第2巻図1-1より一部加筆）

## 2 歴史的環境

千音寺遺跡(右図1)周辺に周知の遺跡はない。

北方に目を向けると、土田遺跡(2)〔清洲町〕、森南遺跡(3)・阿弥陀寺遺跡(4)・大淵遺跡(5)〔甚目寺町〕など、弥生時代の集落遺跡などとして知られた遺跡が点在している。また甚目寺遺跡(6)や、7世紀後半～10世紀の寺院跡が確認されている清林寺遺跡(7)なども近在する。これらの遺跡は、いずれも古代～中世にかけても集落跡など人が活動していた痕跡がみられる。

庄内川対岸である東方には、岩塚1・2・3号墳(8～10)、岩塚城跡(11)・稲葉地城跡(12)といった戦国期の城跡、古代以降の散布地である稲葉地東遺跡(13)が存在する〔名古屋市中村区〕。

一方、南に目を転じると、おもに平安時代～室町時代の遺物散布地と城跡が点在している。前者は戸田遺跡(14)、戸田A遺跡(15)、包里遺跡(16)、伏屋遺跡(17)といった『尾張国富田荘絵図』との関連で注目される遺跡である。市教委1・2次調査の報告【文献1】では字界を参考にマッチングが試みられており、それぞれ建物跡が描かれている地にほぼ当てはまるという結果を得ている。しかし、これまでに発掘調査がおこなわれた遺跡はあまりにも少なく(註1)、考古学的な方向からの検証は将来に期待したい。後者は前田城跡(18)、助光城跡(19)、榎津城跡(20)、江松城跡(21)、下之一色城跡(22)、東起城跡(23)で、いずれも戦国時代以降の築城である〔名古屋市中川区〕。

このように、千音寺遺跡より北や東には低地部でも古い時代の遺跡が存在するが、南方で人の痕跡が残るのは平安時代以降という差異がある。これは海岸線の位置によるものと考えられ、伊勢湾深くまで入り込んでいた海岸線が時代を経るごとに後退し、陸地化していった流れに沿うものである。

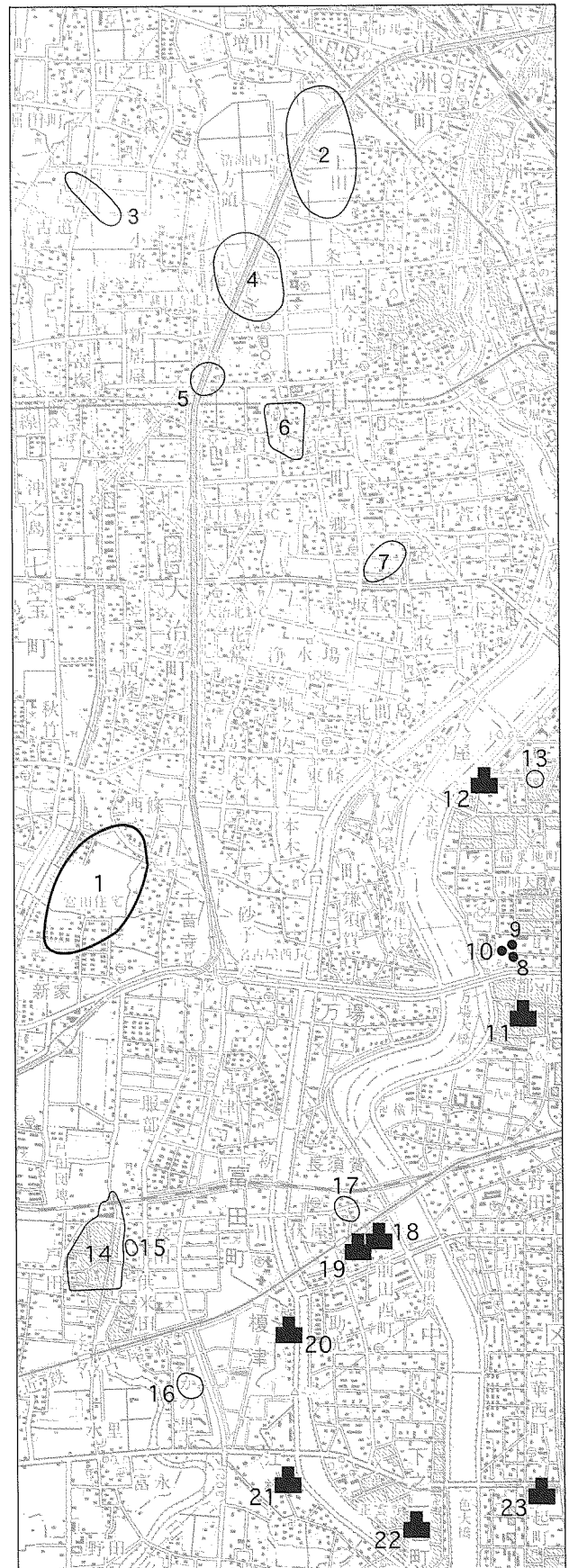


図2 遺跡分布図 (国土地理院発行1/50000名古屋北部・南部)



#### 4 調査研究史

千音寺遺跡一帯、とくに南方は『尾張国富田荘絵図』に描かれている範囲であり、現在も当時の条里地割が字地名とともに比較的良好に残存している。このため、中世荘園研究の好例としてかなり以前から注目を集め、多くの研究者により論じられてきた地域である。しかしそれは、文献史学からのアプローチに限られており、考古学的な調査研究はほとんどおこなわれておらず、近年ようやくその端緒についたところである。

千音寺遺跡の発掘調査が本格的に実施されるようになったのは1990年代末のことである。

今回の5次調査までに、名古屋市教委による調査が4回、民間委託による調査が3回実施されている(表1/註2)。おもに中世の遺構と古墳時代～中世の遺物が出土している。市教委1・2次調査とそれに南接した地点で実施された民間委託調査では、12世紀後半～13世紀頃の屋敷地と推定される建物跡や井戸、猿投・瀬戸・常滑・渥美の各産地の中世陶器などが出土した。しかし、それ以外の地点では遺構・遺物ともに分布は極めて稀薄な状況が確認されている。

調査名	調査年度	面積 (㎡)	調査者	調査原因	主な時代	主な遺物/遺物	特記事項	参考文献
市教委1次	1998 (平成10)	1800	名古屋市教委	市営住宅 建設	古墳時代～ 中世	溝・建物跡・井戸/ 中世陶器	中世屋敷地	文献1
市教委2次	1999 (平成11)	3700	名古屋市教委	市営住宅 建設	古墳時代～ 中世	溝・建物跡/中世陶 器	中世屋敷地	文献1
市教委3次	2000 (平成12)	350	名古屋市教委	市営住宅 建設	古代～中世	溝・穴/中世陶器		文献2
市教委4次	2001 (平成13)	72	名古屋市教委	下水道 築造工事	中世	なし/山茶碗		文献3
民間委託A	2000 (平成12)	600	(株)パスコ	市営住宅 建設	古墳時代～ 中世	溝・土坑/中世陶器	中世屋敷地	文献4
民間委託B	2001 (平成13)	50	国際航業(株)	下水道 築造工事	中世	なし/須恵器・山茶 碗		文献5
民間委託C	2003 (平成15)	153	(株)イビソク	下水道 築造工事	中世	土坑/山茶碗		文献6
市教委5次	2003 (平成15)	810	名古屋市教委	下水道 築造工事	中世～近代	土坑/山茶碗		本書

表1 調査年表(「調査名」は図4と共通。「参考文献」は19ページ参照)

- 註1 戸田遺跡(旧・戸田B遺跡および戸田城跡を含む)で、個人住宅建設や下水道築造工事などにともない、近年発掘調査が実施されている以外は、ほとんど調査歴がない。
- 註2 なお今回の5次調査ののち、2004(平成16)年度に民間委託で発掘調査がおこなわれている。調査地点は遺跡推定範囲中央よりやや南西、1・2次調査地点の西側にあたる。

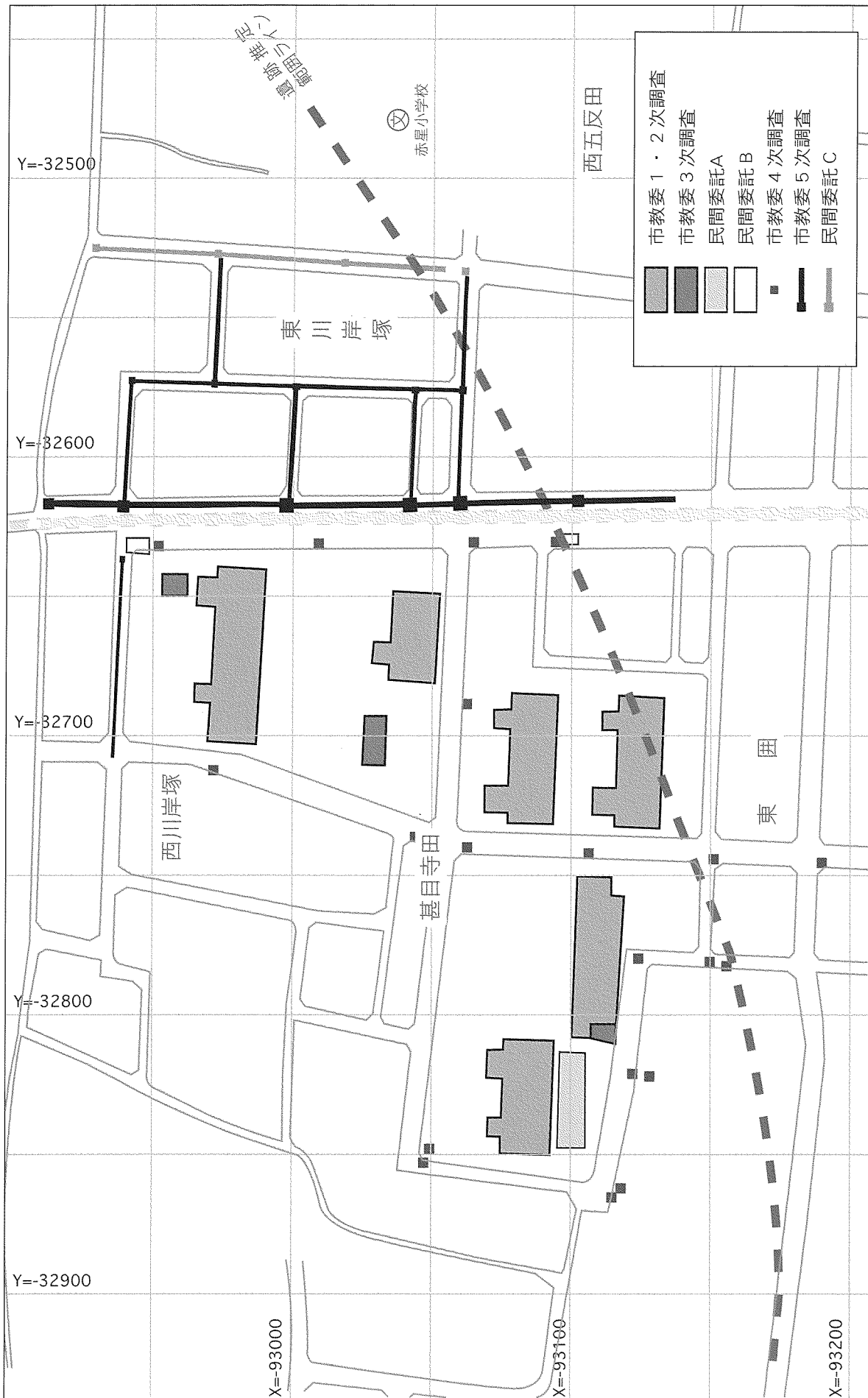


図4 過去の調査地点および5次調査地点位置 (縮尺1/2000)

## II 5次調査の概要

### 1 調査地点

5次調査地点は現在の遺跡推定範囲の南東端にあたり、一部範囲外におよんでいる。屋敷地と推定される1・2次調査地点をはじめ、これまでに市教委で実施してきた調査としては、最も東に位置する調査地点となる。『尾張国富田荘絵図』に照らし合わせた場合、「新家里」の北北東方向、「御品田山後」の西側にあたる部分に相当すると思われる。現在の小字名は「東川岸塚」および「西川岸塚」である。

調査地点付近は、近世以降の地籍図には田畑地と記されており、長らく耕作地として活用されてきたものと考えられた。遺構・遺物の分布密度は希薄と推察され、調査にあたっては遺跡推定範囲末端の状況確認を主眼においた。

### 2 調査の経緯と方法

5次調査は、下水道築造に伴って実施した。

調査区は下水管を埋設する範囲に限られた。対象面積は約810㎡におよぶが、形状は2m×2mのマンホール部分12ヶ所および平均幅約1m×全長約750mの管路部分からなるトレンチ状のもので、平面的な広がり把握することは困難なものであった。また、下水管の埋設工事も調査と並行しておこなう必要があった。

このため調査は、土層堆積の観察および記録作業を中心とし、状況にあわせて対応する方向ですすめた。層位の大きな変化や遺構を確認した部分以外は、マンホール部分では最低一ヶ所、管路部分は基本的に4mごとに観察測点を設け、模式的に土層柱状図を作成した。

また、下水道工事を並行しておこなう都合上、いずれかの方向から一貫して調査を進めていくことは難しく、管敷設の順にあわせ、管路を区分して調査した。

調査期間は2003(平成15)年11月11日～2004(平成16)年3月31日と、下水道の埋設工期も含まれていたため、やや長期にわたった。



写真2 調査地点付近状況 (北西から俯瞰)



写真3 調査風景



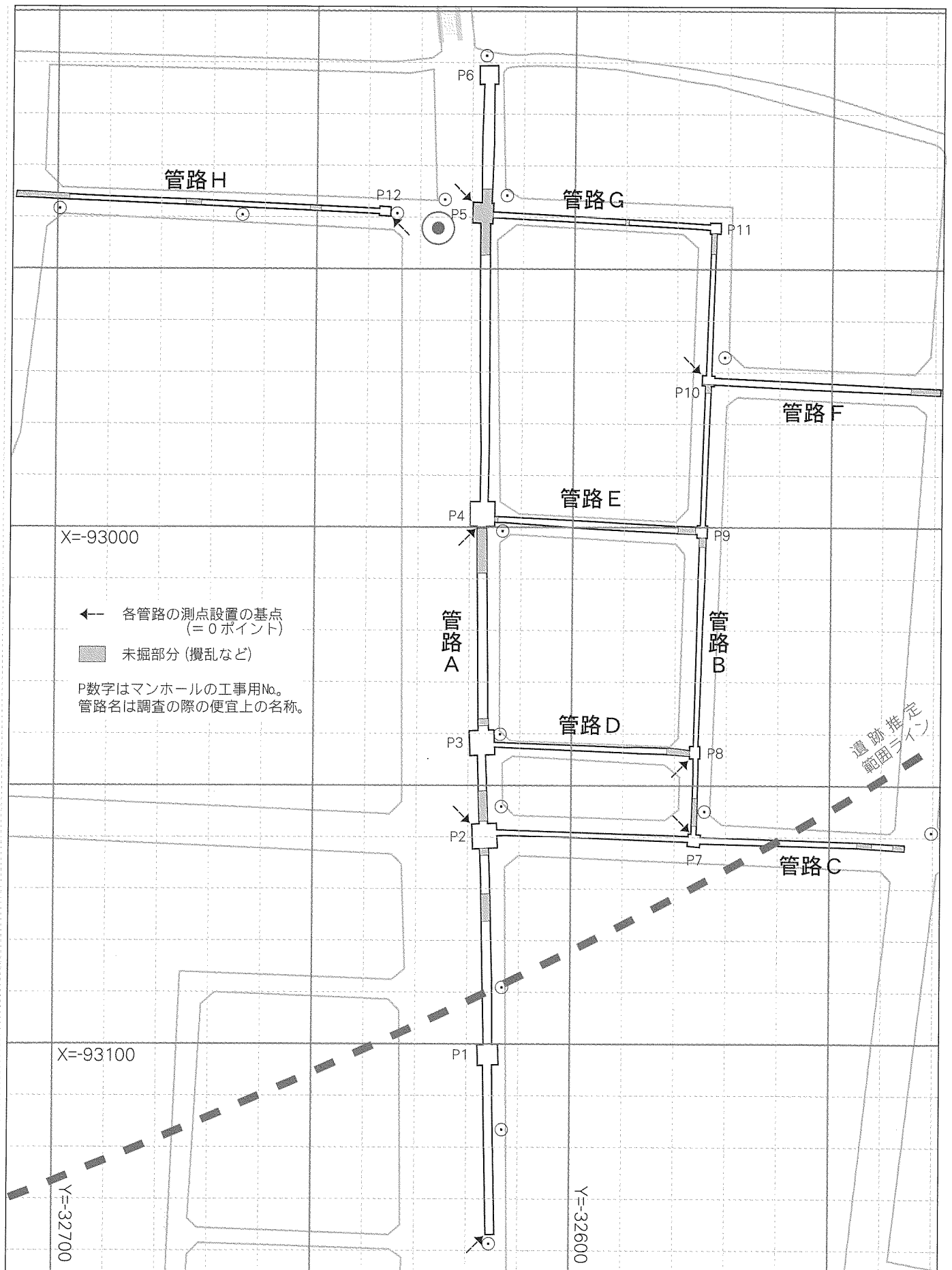


図5 5次調査平面図 (1/1000)

### 3 5次調査の成果

#### (1) 基本土層

土層は基本的に表土・盛土（道路舗装 As 含む）、暗灰色土、灰黄褐色土、灰褐色粘質土、灰色砂層と堆積していた。暗灰色土は近世以降の耕作土層、灰黄褐色土は近世以降の床土層と考えられる。灰褐色粘質土はシルト気味で鉄分の沈着がよくみられたことから、氾濫など水の動きによって堆積した土層と捉えている。

灰色砂層は、色味や粒子の差が位置によってみられたが、基盤層（地山面）に相当するものと判断した。時折植物遺体がわずかに混入する。なかには、フナクイムシによる浸食痕跡らしき凹凸をもつものもある。部分的にシルト質土層を間に挟み込む堆積がみられる。

面的ではないものの広範囲を調査したが、調査区全体をとおして非常に安定した堆積状況を確認した。ほぼ水平堆積だが、場所によって若干の違いがみられた。しかしそれは、自然堆積と考えられる範囲の変化であったり、島畠と推測される盛土が確認できたといった近世以降の農耕作に関係するものであったりと、中世以前の状況を確認しうる情報に結びつくものではなかった。

本書では、層位に変化がみられた地点を中心に、測点を絞って報告する。

#### (2) 遺構・遺物

今回の調査では、目立った遺構は確認できなかった。これは、面的に把握しにくい調査区だったこともあるが、どちらかといえば、もともと遺構の密度が極めて低いあたりだと推測される。屋敷地にあたる1・2次調査地点よりやや離れていること、現在暗渠となっている宮田用水路は近世には水路として利用されていたことなどから、かなり以前から調査区付近は耕作地として利用されていたと推測される。近世以降の農耕作による影響で遺構が失われたこともあるだろうし、中世においても農耕作地であったなら本来的に遺構が少ない可能性もある。

ところどころで落ち込みを確認した。これらは近世以降の耕作土層以降の新しい時期のものである。中世以前と考えられる遺構は見あたらなかった。

暗灰色土からは中世以降近代までの陶磁器片、灰黄褐色土からは中世以降の陶器片が、ごくわずかに出土している。大半は山茶碗の小破片である。時期を確実に比定できるほどの特徴を持ったものは無かった。だが、わずかながらも中世期の遺物が出土していることから、中世の包含層が本来存在していたことがうかがえる。

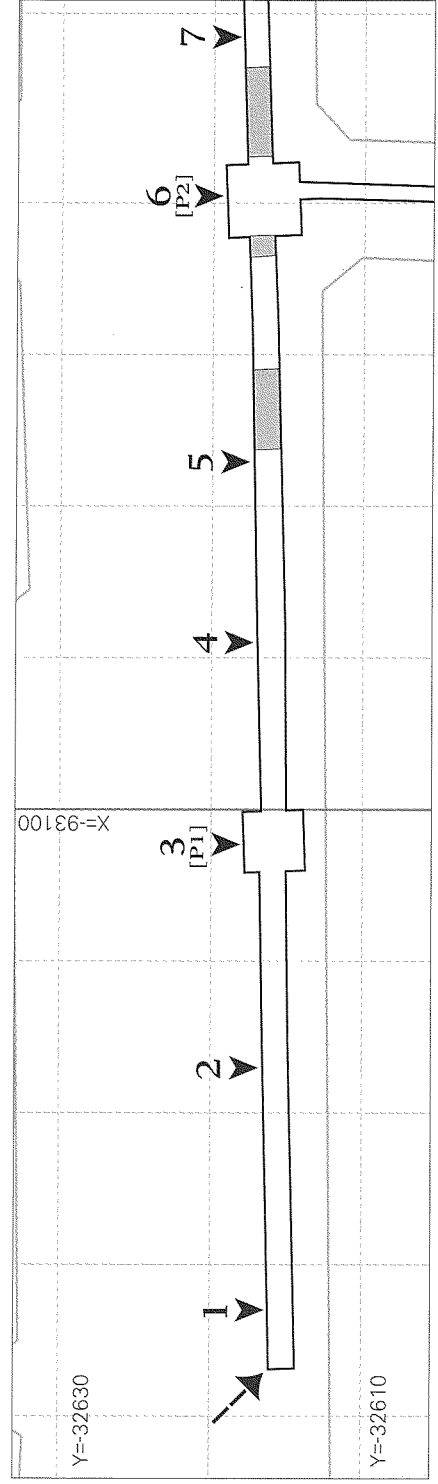
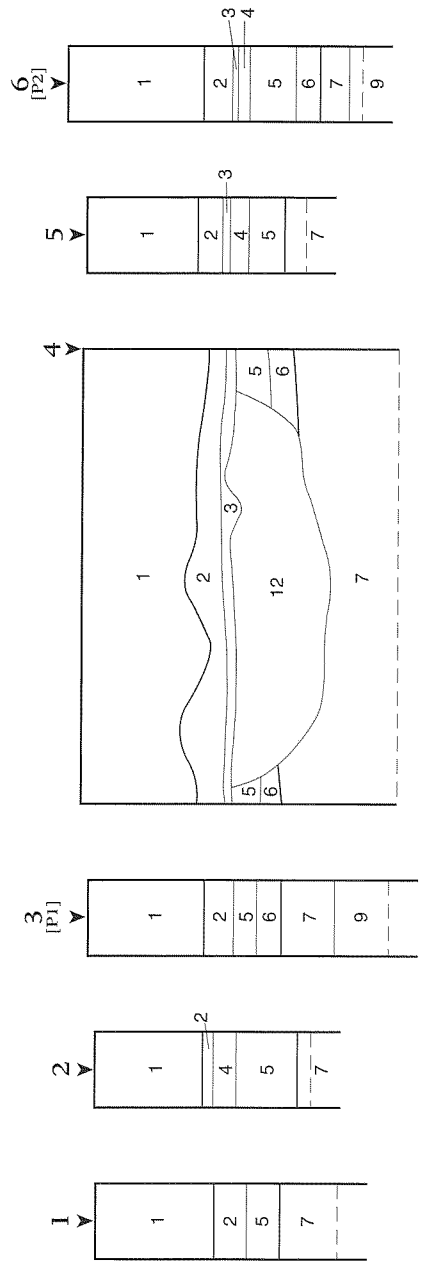
過去の調査では、須恵器や灰釉陶器などの、中世よりも古い時期の遺物も出土しているが、5次調査ではまったく見あたらぬ。より古い時期の包含層は、宮田用水路よりも西に存在していた可能性が考えられる。これは、現状では大きな標高差は感じられないが、屋敷地に近い方がより微高地帯であったためと思われる。

各地点の状況は便宜的に定めた管路ごとに図にした。管路の区分については、前ページを参照されたい。また、土層注記については、一覧表にまとめたのちに記載している（表2）。



写真4 測点3 [P1] 状況 (東から)

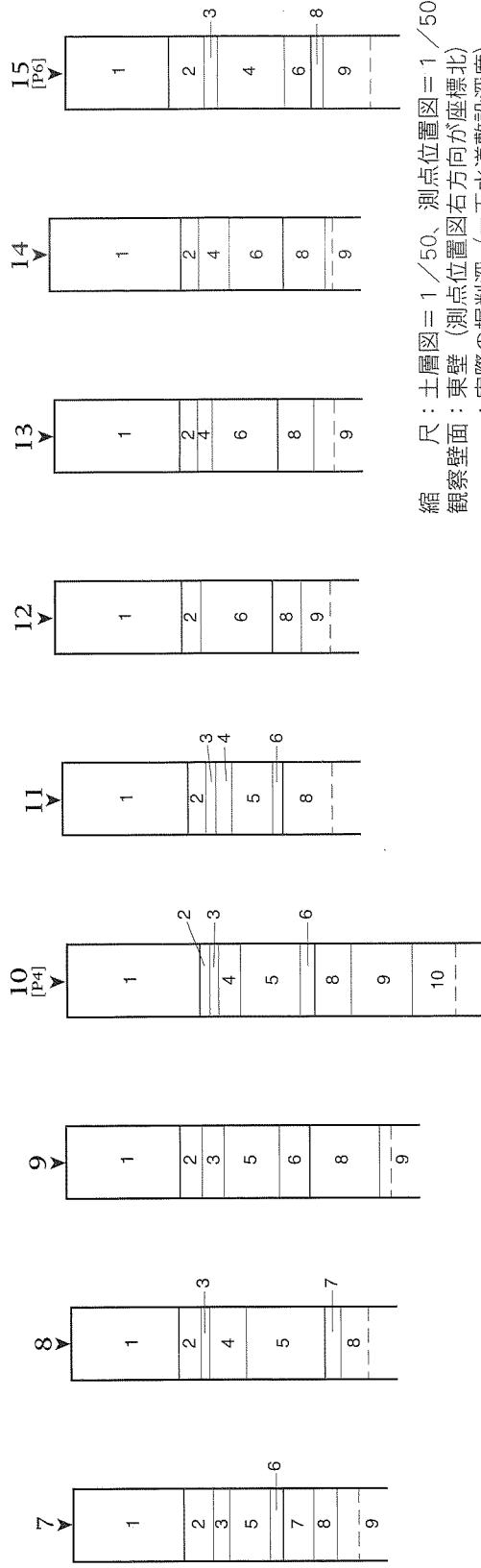
T.P.=1.0m



縮 尺：土層図=1/50  
 測点位置図=1/500  
 観察壁面：東壁  
 (測点位置図右方向が西標北)  
 -----：実際の掘削深  
 (=下水道建設深度)  
 土層図の番号は「表2 土層注記  
 一覧表 (18ページ)」に対応

図6 土層図—管路A①(南半)

T.P.=1.0m



縮 尺：土層図 = 1/50、測点位置図 = 1/500  
観察壁面：東壁（測点位置図右方向が座標北）  
-----：実際の掘削深（= 下水道敷設深度）

土層図の番号は「表2 土層注記一覧表（18ページ）」に対応

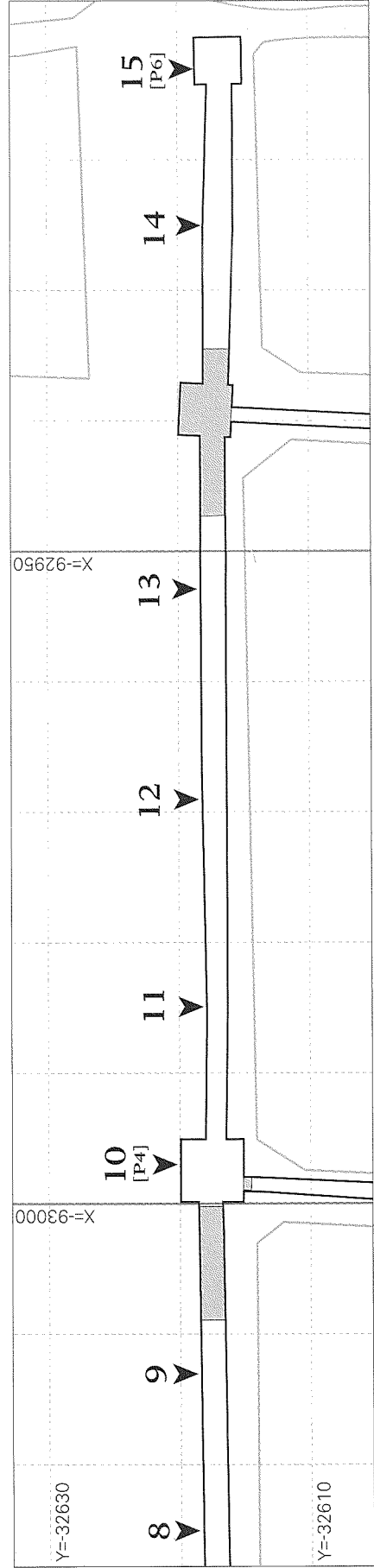
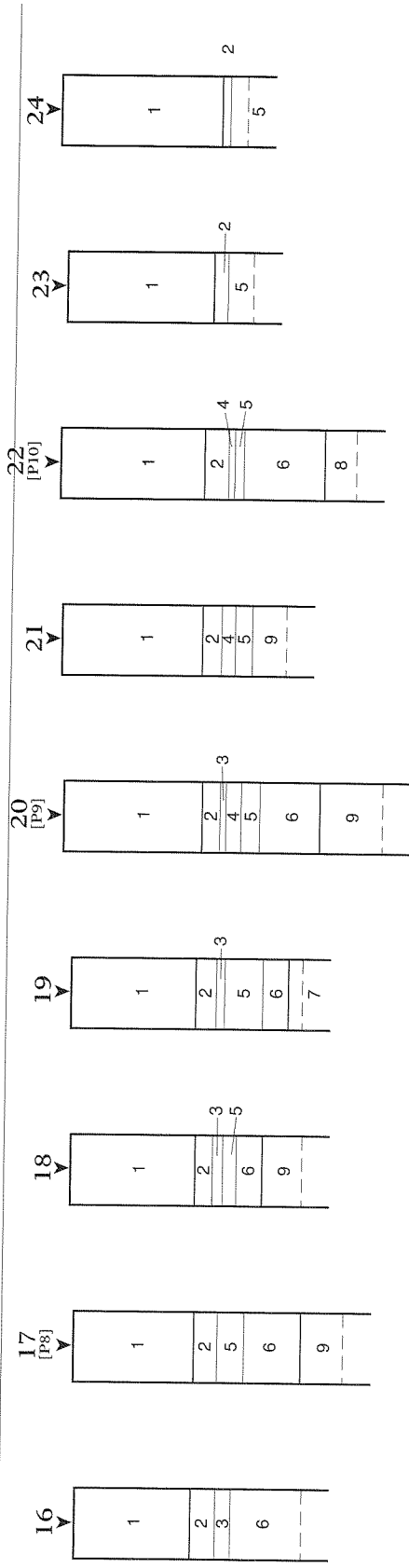


図7 土層図 — 管路A② (北半)

T.P.=1.0m



縮尺：土層図=1/50、測点位置図=1/500  
 観察壁面：東壁（測点位置図右方向が座標北）  
 - - - - -：実際の掘削深（=下水道敷設深度）  
 土層図の番号は「表2 土層注記一覧表（18ページ）」に対応

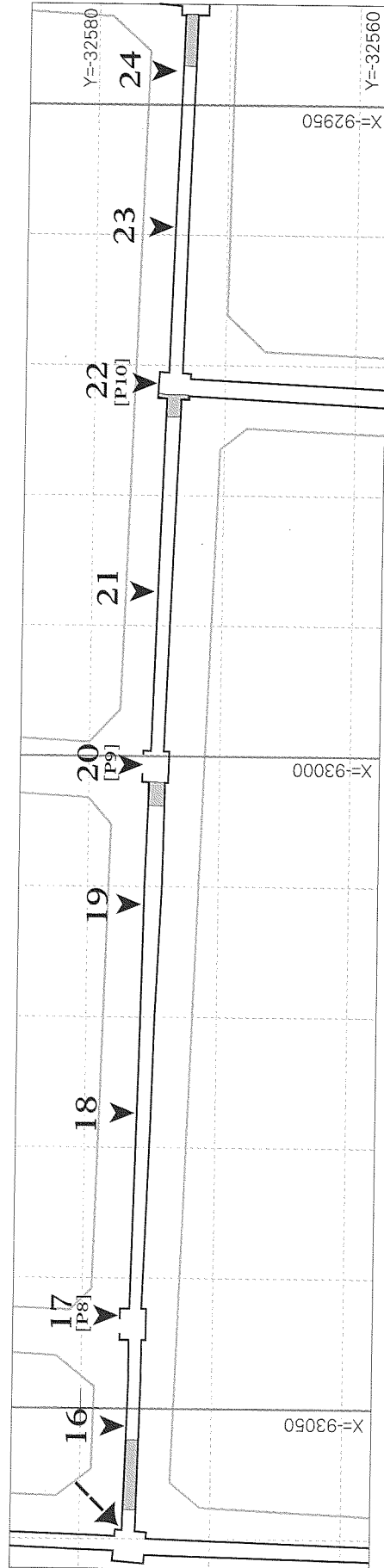


図8 土層図—管路B

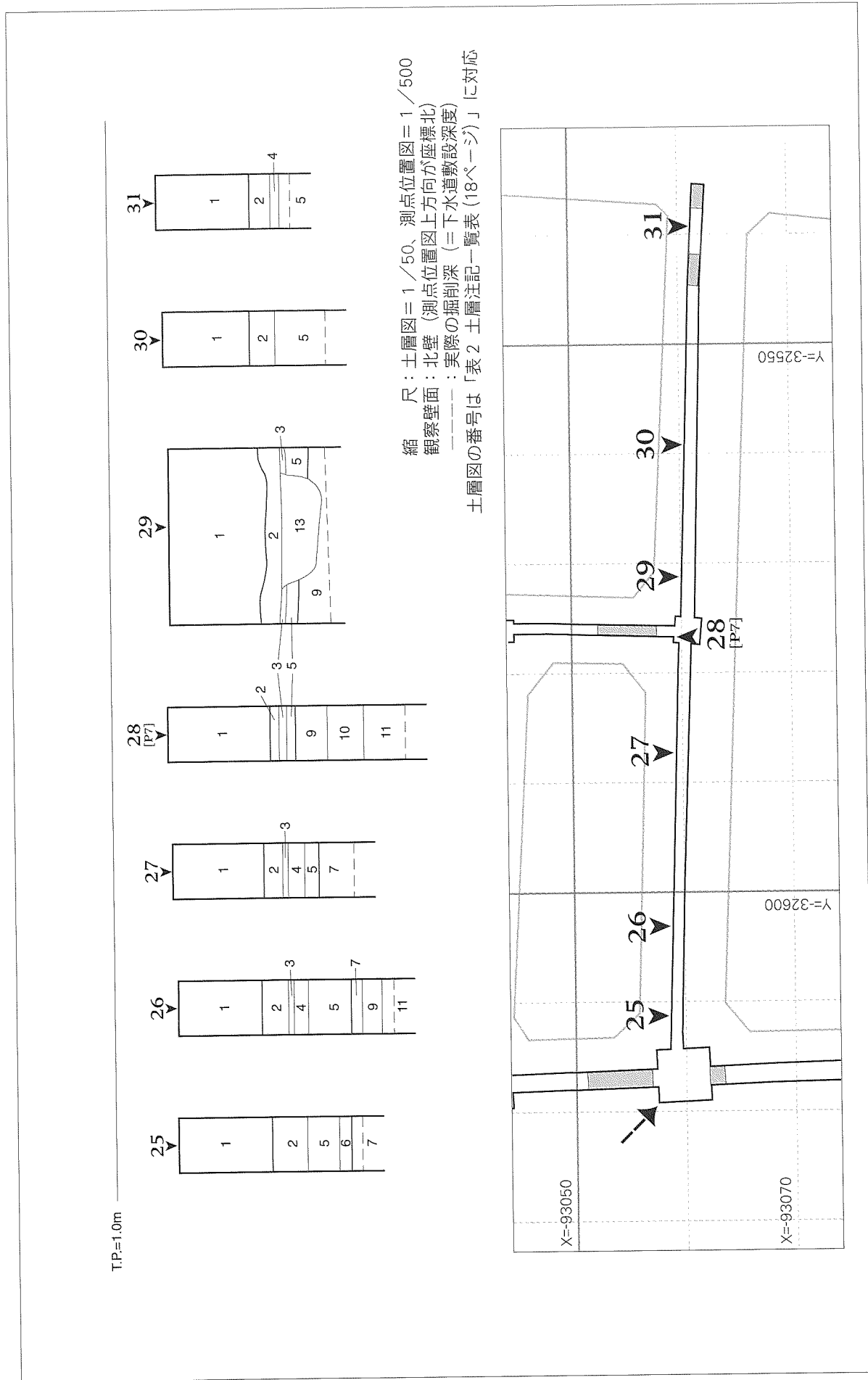
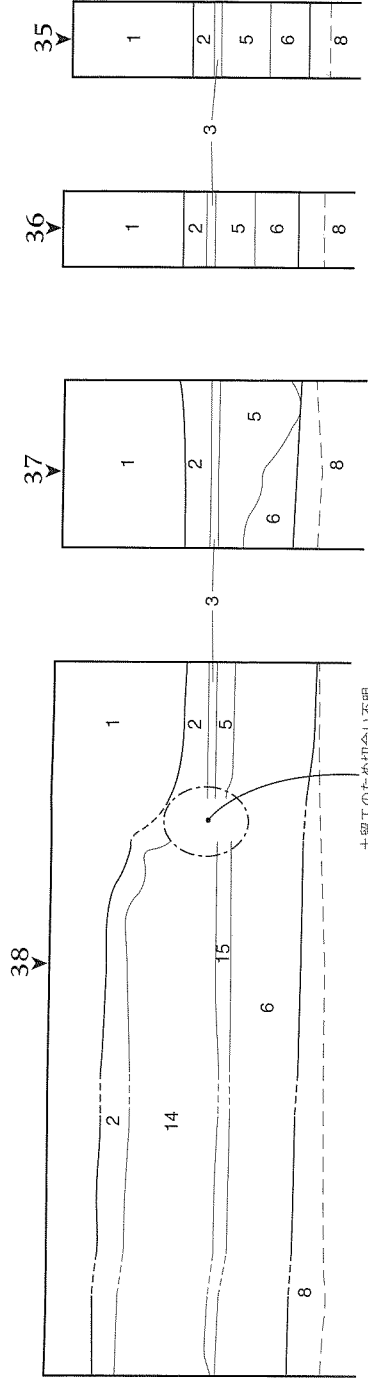


図9 土層図—管路C

T.P.=1.0m



土留工のため切合い不明

縮 尺 : 土層図 = 1 / 50、測点位置図 = 1 / 500  
 観察壁面 : 南壁 (測点位置図下方向が座標北)  
 - - - - : 実際の掘削深 (= 下水道敷設深度)  
 土層図の番号は「表 2 土層注記一覧表 (18ページ)」に対応

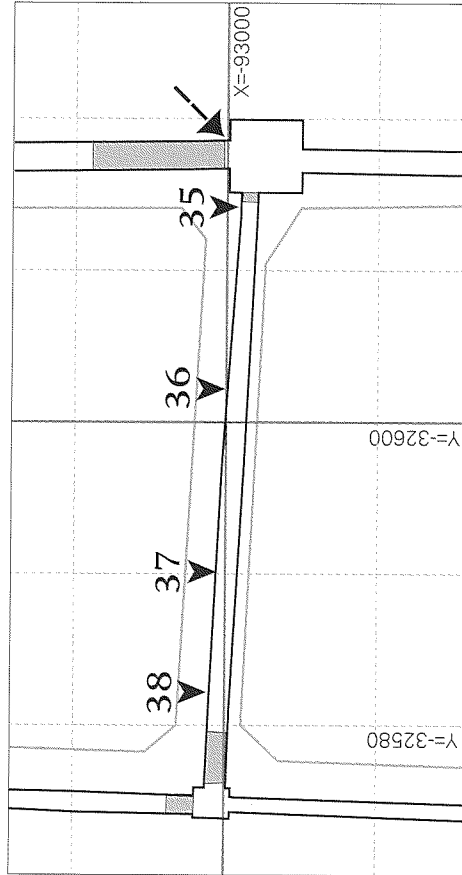
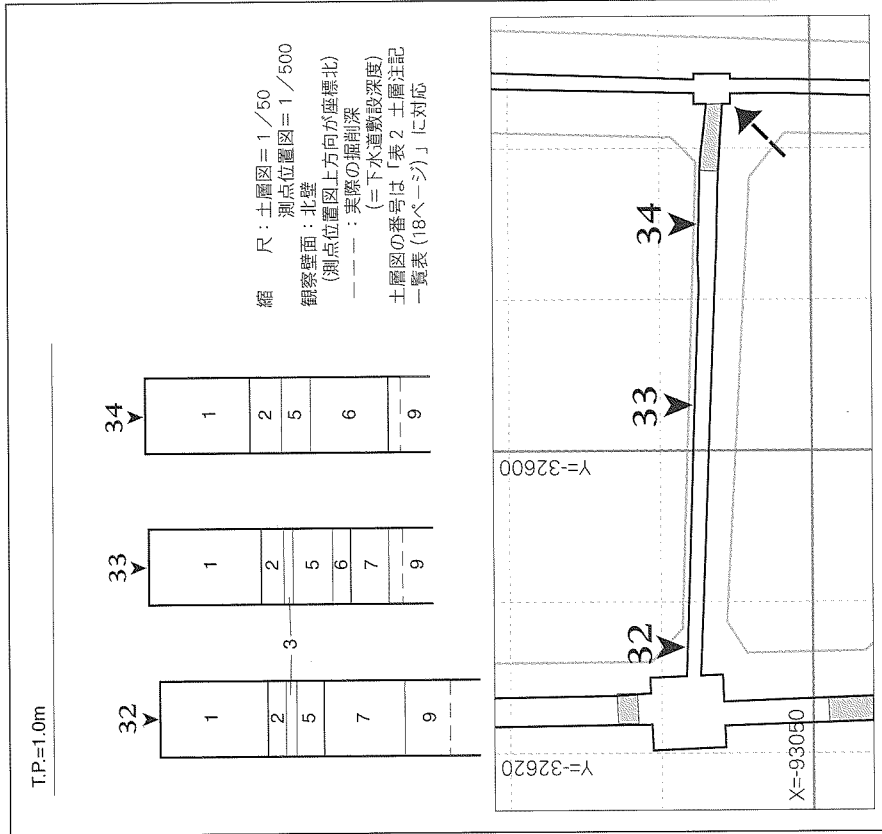
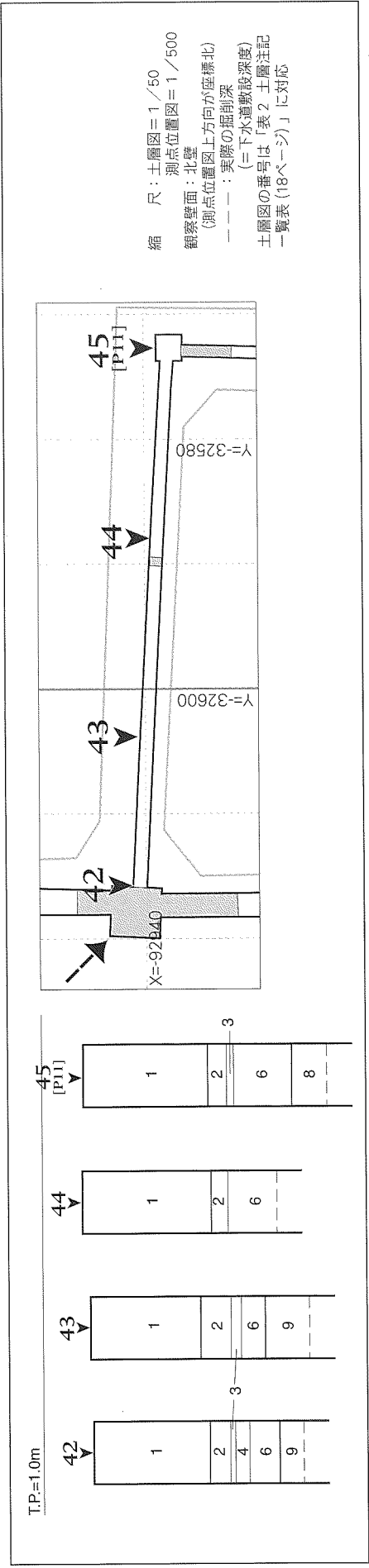


写真 5 測点 39 状況  
 (北西から)

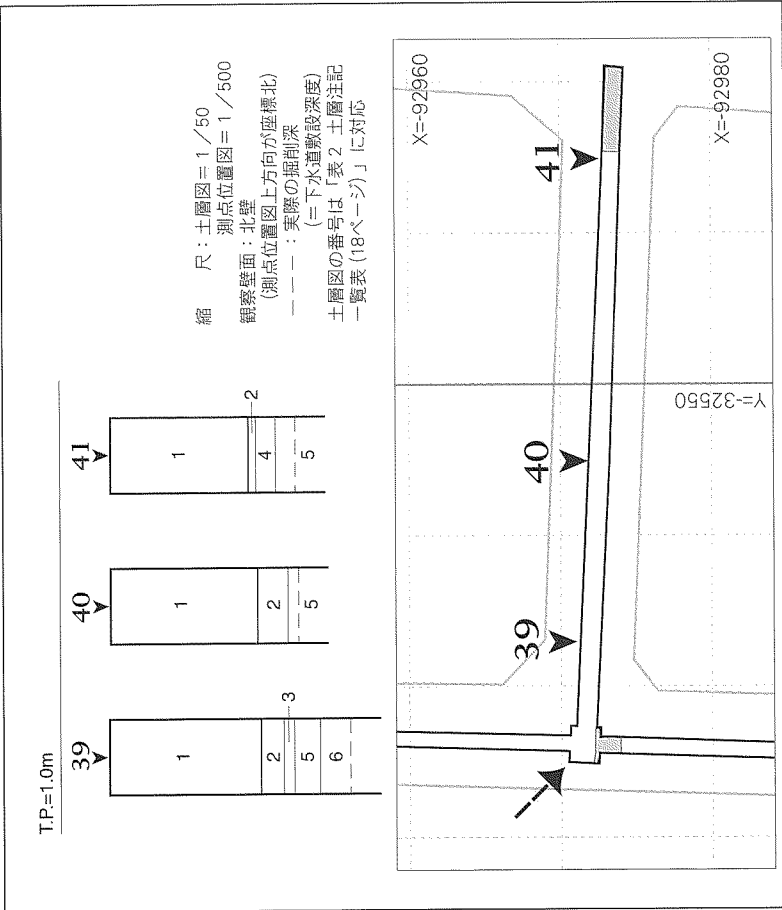
図 10 土層図 — 管路 E



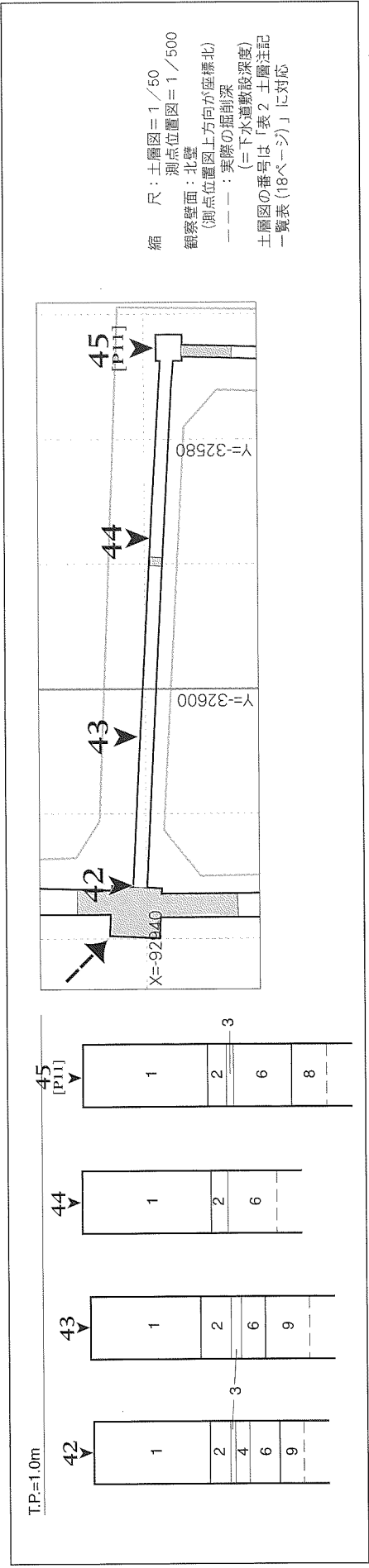
↓ 図 13 土層図 — 管路 G



← 図 11 土層図 — 管路 D



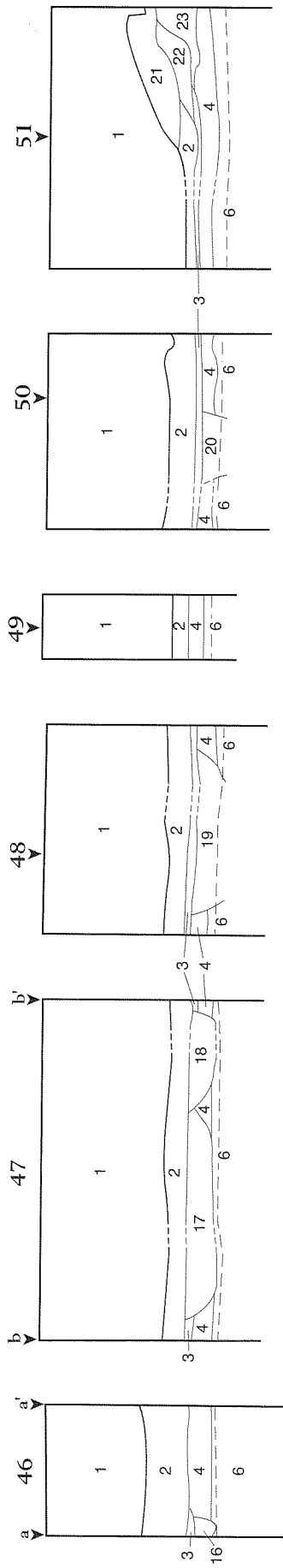
↓ 図 13 土層図 — 管路 G



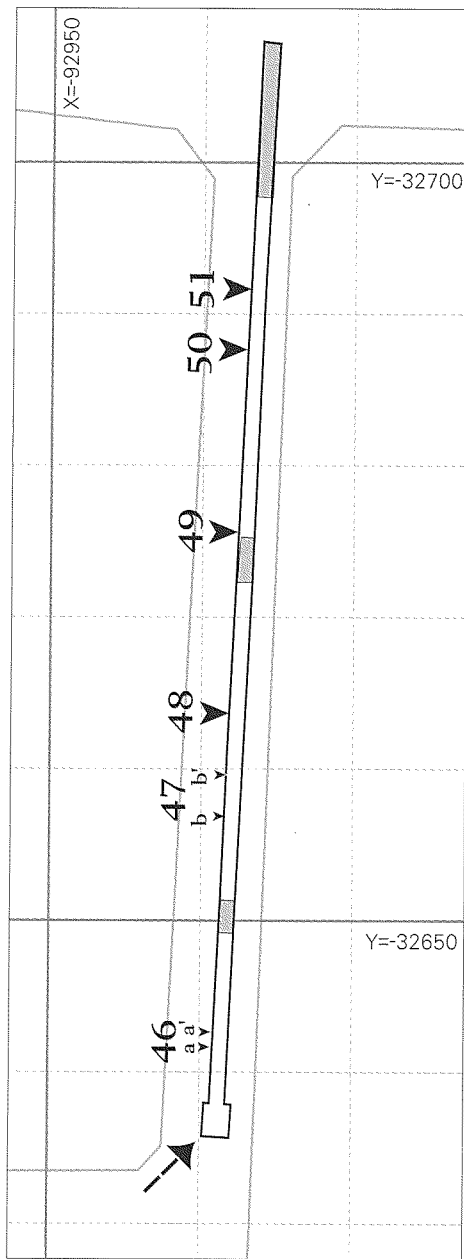
← 図 11 土層図 — 管路 D



T.P.=1.0m



縮 尺：土層図＝1/50、測点位置図＝1/500  
 観察壁面：南壁（測点位置図下方向が座標北）  
 -----：実際の掘削深（＝下水道敷設深度）  
 土層図の番号は「表2 土層注記一覧表（18ページ）」に対応



管路Hと称したこの区間のみ用水路より西に位置し、市教委1次調査A区の北側水路にあたる。

他の区間と比較すると、層位の変化がよく見られる。ピット状の落ち込みがいくつか確認できたが、いずれも平面的な広がり無く、断面での確認にとどまった。

図11 土層図—管路H

No.	土層名	特 徴	備考
1	表土・盛土	(アスファルト舗装含む)	
2	暗灰色土	水分多く含む。かなり黒み強い。ややシルトがち。比較的均質。	
3	灰黄褐色土	水分含む。ややシルト気味。黄みがかった明褐色土Brを多く含む。	
4	灰褐色シルト	やや砂質。ブロック感を残したマーブル状に灰色土Brが多く混ざる。	
5	灰褐色粘質土	水分含む。シルト。灰色土Br(大)と黄みがかった明褐色土Br(大)がマーブル状に混ざる。少量の鉄分が筋状に沈着。	
6	灰色シルト	砂がち。鉄分沈着が非常に顕著で量も多い。比較的均質。部分的に青みが強くなる。	
7	灰色砂層	全体に淡い灰色。粒子は比較的細かい。部分的に同色シルトBrが上位に入る。下に鉄分が沈着する部分有り。	
8	暗茶灰色砂層	ややシルト気味。粒子はやや粗め。均質。部分的に鉄分沈着。色味は濃い。	
9	暗灰色砂層	青みが強い。粒子は大きくやや粗い印象。上面ライン-0.1mあたりより下に植物片まばらに混ざること。部分的に鉄分沈着。	
10	淡青灰色砂層	粗めの砂粒。色味が明るい灰色で青みがかった。鉄分沈着が非常に目立つ。	
11	茶灰色砂層	やや粗めの砂粒。全体に茶色味強い。均質。	
12	灰褐色粘質シルト	水分含む。灰色土に灰褐色土Br(5cm前後)が全体に多く混ざる。	遺構?埋土。
13	暗茶灰色シルト	やや砂入る。1~2cm大灰黄褐色土Brが全体に均一に混ざる。均質。	遺構?埋土。
14	明褐色粘質土	非常に均質で混入物はほぼ見られない。熱田層上位の明褐色粘質土に性質など似た印象がある。東側にいくほどグライ化して灰色に変色。	島島の盛土か
15	灰褐色粘質土	質は13に似る。黄みが強くしっかりした土。東側にいくほどグライ化して灰色みが強く出る。	島島の盛土か
16	暗灰色シルト	水分含む。混入物無く均質な印象。	ビット状遺構?埋土
17	暗茶灰色シルト	やや色味薄い印象。暗灰色に暗茶色のシルトが均質に混ざる。	遺構?埋土
18	茶灰色シルト	やや砂がち。灰黄褐色土Brが部分的に混入。やや汚れた印象。	遺構?埋土
19	暗灰色シルト	暗茶灰色や灰黄褐色など数種の土がマーブル状に混ざり合う。汚れた印象。	遺構?埋土
20	黄灰色シルト	やや水分含む。灰色シルトに1~2cm大黄色シルトBrが全体に多く混ざる。	遺構?埋土
21	暗灰色土	水分含む。比較的均質で全体に濃茶色がかかる。部分的に灰色砂層Brと1cm以下の小礫入る。	
22	暗灰色シルト	水分含む。灰色シルトが全体に混ざる。比較的均質。	
23	淡灰色シルト	ややオリーブ色がかかる。暗茶灰色シルトBrが部分的に混ざる。うすく鉄分沈着する。	

表2 土層注記一覧表

### Ⅲ 小 結

5次調査で得られた成果を簡潔にまとめると、遺構・遺物の密度がかなり低い地点であった、ということになる。

その理由については、もともと密度が稀薄であったこと、また全体に土層の変化が少ないことを考慮すれば、近世以降の農耕作地としての利用を反映していることなどが考えられる。

確実な遺構はなかったがわずかながらも山茶碗小片が出土していることから、かつて当地点付近に包含層・遺構が多少なりとも存在していたと推察される。それが近世以降の農耕作によって現状のように変化したのだろう。この包含層等は、過去の調査地点では出土した古墳時代～古代の遺物が当地点ではまったく確認できなかったことから、ほぼ中世期に限られるのではないだろうか。

また、基盤層と考えた砂層のレベルは、宮田用水路西側の過去調査地点に比べて全体に低く、くわえて東へ下がっていく傾向がみられた。このことから、もともとが湿地であったことやその地形を利用して水田耕作がおこなわれていたことなどが推測される。かなり以前からこのような土地利用をされていたならば、当地点付近の稀薄さも頷ける。

以上の点から5次調査地点は、時期は不明だがかなり以前からの農耕地であったと推察される。

千音寺遺跡の考古学的な調査研究が始まって、まだ十年にも満たない。調査はごく限られた範囲ではあるが、しかし、ほとんどゼロに近かった遺跡の情報は発掘調査をとおして格段に増えた。その一方で、先の遺跡推定範囲のように、検討が必要な事項もあがり始めている。今後は地道に発掘調査を重ねていくのと同時に、得られた各地点の成果をもとに分析・検討を重ねることもまた、重要である。

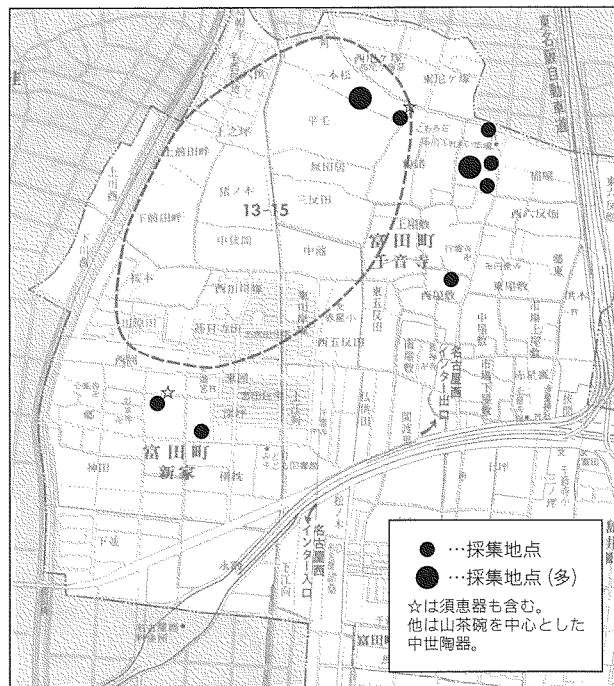


図 13 周辺の踏査結果

#### 【参考文献】

- 1 山田鉦一・野口泰子 2000 『埋蔵文化財調査報告書 35 千音寺遺跡 (第1・2次)』名古屋市文化財調査報告 47 名古屋市教育委員会
- 2 野澤則幸 2001 「千音寺遺跡第3次発掘調査」『埋蔵文化財調査報告書 36 朝日遺跡 (第7～10次)・茶白山古墳 (第3次)・千音寺遺跡 (第3次)・H-113号窯』名古屋市文化財調査報告 49 名古屋市教育委員会
- 3 村木誠 2002 「千音寺遺跡第4次発掘調査」『埋蔵文化財調査報告書 41 正木町遺跡 (第14～15次)・伊勢山中学校遺跡 (第9次)・堅三蔵通遺跡 (第16次)・千音寺遺跡 (第4次)』名古屋市文化財調査報告 54 名古屋市教育委員会
- 4 伊藤雅乃 2001 『千音寺遺跡 (北宮田団地) 発掘報告書』名古屋市住宅都市局
- 5 東園千輝男 2001 『下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 千音寺遺跡』名古屋市上下水道局下水道本部
- 6 近藤真人 2004 『千音寺遺跡発掘調査報告書-第4次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う調査-』名古屋市上下水道局下水道本部

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	せんのもんじいせきだいがじはつくつちようさほうこくしょ							
書名	千音寺遺跡第5次発掘調査報告書							
編著者名	田原和美							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223							
発行機関	名古屋市教育委員会							
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052-972-3268							
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せんのもんじいせき 千音寺遺跡	なごやし 名古屋市 なかがわく 中川区 とみたちょうおおあさ 富田町大字 せんのもんじ 千音寺	23100	13-15	35° 09' 20" ~ 29"	136° 48' 34" ~ 45"	2003.11.11 ~ 2004.3.31	約810	下水道 築造工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
千音寺遺跡	散布地	中世~近代	土坑		山茶碗・陶磁器片			

## 千音寺遺跡第5次発掘調査報告書

2005 (平成17) 年 3 月 31 日 発行

編集 名古屋市見晴台考古資料館

発行 名古屋市教育委員会

印刷 西濃印刷株式会社